

● 教育実習改革特別プロジェクト ●

## 地域に根ざす教育実習

Practice-Teaching based on Community

川本 治雄

Haruo KAWAMOTO

## 地域に根ざす教育実習

Practice-Teaching based on Community

川本 治雄

Haruo KAWAMOTO  
(和歌山大学教育学部)

教員養成において実践的教育力のある教員の育成が課題になっている。今日、地域の課題を総合的にとらえ子ども達の発達との関係において把握する力をいかにして身に付けさせるかが大きな課題となっている。このような、地域と学校の両側面から開かれた学校づくりを進める基本的な視点を体験を通して獲得（体得）させるために、教育実習体系の見直しとその充実に取り組み、「へき地・複式学級教育実習」を推進してきた。教員養成学部が通常行う4週間の実習終了後に位置付けた。その最大の特徴は、へき地・複式学級実施小学校区でのホームステイや実習実施担当町のセミナーハウスでの宿泊（合宿）等を通して、地域と学校の関係を把握するきっかけを学生に提供することである。

キーワード：教員養成・地域に根ざす・教育実習・ホームステイ・合宿

### 1. 教員養成と教育実習

実践的教育力を育成する教員養成が課題になっている昨今、教育現場と大学との連携はますます重要になってきている。2000年9月に和歌山大学教育学部長はこれからの教員養成について教員養成特別委員会に諮問をした。「これからの教員養成について」の答申は、2001年3月最終審議を終え、その内容が、教授会に報告された。その中心は「専門分野に秀でた特色ある教員養成」であった。しかしこの趣旨は和歌山大学教育学部教授会の構成員に、各自それぞれ受け止められたものの、教育学部として組織的に、直接的に検討されることはなく、教育学部の将来構想に関わる論議が先行して行われた。

全国的には、今後の国立の教員養成系大学・学部のあり方について、国立の教員養成系大学・学部の在り方に関する懇談会が平成12年（2001年）8月に設置され、翌年11月報告書がまとめられた。（『今後の国立の教員養成系大学・学部のあり方について』<sup>注1</sup>）ここでの最大の関心は、現在の大学・学部が「教員養成担当大学」になるのかそれとも一般大学になるのかに集中し、以降の大学再編と関わったかたちでの教育学部の再編・統合の論議が極めて性急にされる時期を迎えることとなった。この『今後の国立の教員養成系大学・学部のあり方について』（略称在り方懇報告）においても、教員養成のパワーアップが強調され、現在

の教員養成の在り方とともに、新たな社会的要請に応えられる教員の養成が求められた。

国立の教員養成大学・学部が直面する主な課題の中で、実践的な教員養成の実施のための学校現場との連携協力の推進について次のように述べている。

「様々な問題を抱える学校現場で、適切に対応できる実践的な能力を持った教員を養成するためにも、また、学校現場の課題解決を支援していくためにも、教員養成学部としては、これまで以上に学校現場と連携協力し、種々の取組を推進していくことが必要となっている。」

今まで、教育職員養成審議会においては、平成9年（1997年）7月から、平成11年（1999年）年12月までの3次にわたる答申をまとめ、教員養成大学・学部のありかたについて検討が進められてきている。

さらに、日本教育大学協会「モデル・コア・カリキュラム」研究プロジェクトが「教員養成コア科目群を軸にしたカリキュラムづくり」<sup>注2</sup>の提案を行っている。日本教育大学協会ではコアカリキュラムによる教員養成の在り方を観察・実習を重視する方向での論議の結果をまとめ、中間答申を平成15年（2003年）9月に発表した。

教員養成の改善の方向として、教育体験とその省察という観点から次のように指摘している。

「何よりも重要なことは、教員養成において『変

容する教育現場の実態を踏まえる』『そこでの教師の仕事や役割を総合的に捉える』という課題を、十分に学生に提供することである。

そのためには、大学において制度化された教育実習以外にも様々な教育的体験の場を提供することが重要である。もちろん、ボランティアの推奨など、こうした体験を学生の自主的な選択に任せることにも意義はあるが、それだけではなく、近年複数の大学で試みられているように、本実習の事前・事後の指導の充実、その改善を通じてシステムとして保障するということが、何よりも肝要である。すなわち、教育実習を中心に、学校教育全般を見渡せるような体験の提供をカリキュラムの中核に置くことである。」この時、「単なる体験至上主義に陥ることは避けねばならない。教育体験を提供するという重要性を認め、それを制度化するとともに、一方で、このような体験を『大学』教育で行うということの意味と内容を明らかにする努力が求められる。」

これは、「体験・参加が大学における研究の蓄積と照らし合わせて検討・考察される（『体験』と『研究』との往還運動がなされる）中で、新たな「知」を形成し獲得するという領域まで高められることが必要となるだろう。こうした、体験と研究の往還運動を意図することが、何よりも大学における責務として求められている。」

「重要なのは、教育現場での実感や、そこに生じる共通する主観的認識を、文脈を超えて共有できる概念や用語、『知』に作り上げることであり、そのことによって教育現場での子どもの指導に有用な方法を示していくことである。また、教育現場における教科の内容と指導に責任を持てるように、現場にフィードバックする中で、大学で教えられている内容を再構築することである。」<sup>注3</sup>

こうした状況下にあつて2002年度の和歌山大学教育学部教育実習委員会では、現状の教育実習の体系の見直し作業を続け、和歌山県教育委員会との連携を図りながら、複式教育研究のプロジェクトチームで検討されていた地域との関わりで、へき地・複式学級教育実習の可能性が論議され出した。2002年9月のことである。その後、教育実習総合センターの教師教育部門の取り組みと教育実習委員会での取り組みとの両者の関係から、地域にあつては、実習生受け入れに伴う学校や地域の活性化のメリット、一方、大学にあつては教育実習の内容の充実というメリットが指摘され、2003年3月に1週間の社会体験実習という位置付けで「へき地・複式学級教育実習」を試行することとなった。この取り組みは2003年度から本格実施に移行し、学校教員養成課程の希望者による教育実習として

プログラムが組み入れカリキュラムに位置づけて運営されている。

## 2. サンドイッチ型教育実習体系による教員養成パワーアッププログラムの取り組み

### 2.1. へき地・複式教育実習とその内容

「地域に開かれた学校づくり」「地域との連携」など、公立学校においても、「地域」との関わりを意識した学校づくりが本格的に検討されようとしている。様々な地域の中にあつて、日々教育活動を展開する「学校」は、地域と切り離されて存在しているのではなく、地域との関わりの中で存在している。しかし、特に強く意識され、意図的に検討されようとしているのは、子どもの「学び」のあり方と関わって大きな変化が学ぶ側（子ども）と教える側（教師）という枠組みを越えて、学びのあり方そのものが現代社会のありようと関わって検討されていることと関係している。

学校教育について振り返るならば、学問の体系をいかにわかりやすく効率的に、系統的に学ばせるかという観点からの学習論や問題解決的な力を養うために、問題場面をどのように設定し問題を解決する中で能力を伸ばすという学習論など、教科教育の学習理論としてだけでなく、教科の枠を越え論争しながらそれぞれの実践を高めてきたという経緯がある。

子どもの側からの生活の変化、それに伴う意識の変化を受けて、生活そのものにかかわって体験的な場面が減少する中で、初等・中等教育での「体験的な学習」の重視は重要な視点の一つである。

一方、教師の側からの大きな変化は、「学ぶ」ことのとらえ直しである。「教えることと学ぶこと」をどのように関係づけ、子どもの生活や現実とどう関わらせて、「ほんとうのことを学んでいくか」という検討を通して、「体験的な学習」を生かしながら、基礎的な学力を身に付け、学びを保障しようと努力している。

こうした今日的な課題への接近を意図しながら、「へき地・複式」学級での実践を通して、教育の本質に関わって実習生に学ばせたいもの、実習生が肌で感じ取り、少人数学級での子ども理解の緻密さや教育的意義を再確認できるもの等を教育実習の内容として取り込むことができると考えた。とりわけ「学ぶこと」と「教えること」について、その原点がとらえられ、実習生（学生）の課題意識を触発する機会を与える「へき地・複式学級における教育実習」の実施を計画した。

### 2.2. へき地・複式学級教育実習の企画

へき地・複式学級教育実習の企画にあたって次の4点を押さえた。(1)平成2003年度より教育学部3回生において、へき地・複式教育実習を実施する。(2)教育実習期間は2週間とし、2月～3月の間に設定す

る。(3) 2003年度より科目の位置づけは、「教育実習」とするが、2002年度はそのための試行と位置付け、大学カリキュラムの実習体験の一つとする。(4) 実施担当は教育実習委員会とする。

とくに、2002年度の試行期間を経て、2003(平成15)年度から「教育実習」として本格実施することにした。2002年度は課題の整理と実施に向けての課題解決に重点的に取り組んだのである。

和歌山県においては、2001(平成13)年度の統計で複式学級を持つ学校は90校に及ぶ。これは、全小学校の28.6%にあたる。これらの複式学校に勤める教員も相当数にのぼる。へき地校数の府県別内訳においても近畿の中でトップを占め、こうした地域特性に見合った教育実習のもつ意味は大きく、指導力のある教員養成における特色ある取り組みとして位置づけられる。<sup>註4</sup>また、このことは大学の地域貢献という側面からの取り組みとして重要な柱となる。

へき地・複式教育実習の目的は、近年の児童生徒数の減少にともない、複式学級が増加する傾向がある和歌山県にあって小規模学校における教育実習を実施することによって、地域と連携した、より幅の広い指導力を持つ教員養成をおこなうことにおいた。そして、この実習の位置付けを、次の4点において実施した。

(ア) 4週間の附属小中学校での基本実習を終えた学生の希望者による「へき地における複式学級応用実習」(2週間)として位置づけること。

(イ) 実践的総合的な指導力を強化し、指導力の向上を図る応用実習としてへき地・複式学級プログラムを実施し、地域でのプログラムは、実習校並びに関係機関および大学の連携のもとに進めること。

(ウ) 複式学級での指導を通して、子どもを取り巻く学校・家庭・地域を視野に入れた教育実践に触れ、総合的な指導力を高めること。

(エ) 地域での活動、PTA活動などの一端に触れ、教育活動を総合的に検討し、子どもにとっての効果的な教育のあり方を体験を通して習得すること。

学部では小学校と中学校の複数免許状の取得を卒業要件としている。3回生と4回生の教育実習をはさむかたちで教育実習を実施するため、4週間実習の後に実施し、4回生での2週間実習の間に実施することとなり、「サンドイッチ型教育実習」と表現できる。この実習の特徴は、実習体系の全体構造から押さえると、4週間実習での体験から学び、次の2週間実習に活かしていくことができるという点である。

### 2.3. 2003年3月に向けての取り組み

2002年度は、2002年12月に入ってから具体的な受け入れ校との折衝となった。これに先立ち、受け入れ先の教育委員会や代表校の校長などと、2002年9月初、実施の可能性を打診しておいた。最終的には、

かつらぎ町内で複式学級を持つ小学校と美里町内で複式学級を持つ小学校の2(町内)地区を教育実習実施地域に決定した。具体的には2003年1月以降、関係教育委員会や受け入れ実習担当小学校との連絡を取り、実習時期や実習生の宿泊などを重点的に検討していった。

時期(期間)については、3回生9月の4週間「基本実習」終了後に実施することを前提に、2002年度の試行は、3回生の3月上旬に1週間(5日間)で実施し、希望者を募り、食費、宿泊費は自己負担で各地区数名程度で実施する方向で計画にはいった。

まず、複式学級をもつ小学校で実施し、2003年度本格実施に向けての実践的課題を検討することとし、2003年度より、希望者による「教育実習」として本格実施するための課題の洗い出しを図った。希望者の募集からはじめ、実習生の決定、事前指導など実際の実習と同じプログラムを組むことによって検討を進めた。

この実習の実施にあたっては、教育実習委員会だけで取り組むのではなく、和歌山県複式教育研究協議会との連携を図り、和歌山県教育委員会担当者との連絡をはじめ、企画・実施打ち合わせ、意見交換等を行いながら進めた。特に美里町教育委員会・かつらぎ町教育委員会とは連絡を密にしながら多大の協力のもとに実施することができた。また、実習校との連絡・調整を行ったが、期間が短く年度末という時期にも左右され、実習プログラムの立案や、教育実習生の評価項目・評価観点・評価基準等については15年度の実績をもとにし16年度に再検討することにした。

### 2.4. 実習生の宿泊施設

実施に向けての検討課題の重要な柱の一つが、実習生の宿泊施設である。基本は、実習校区における「ホームステイ」であるが、ステイ先の確保は、大きな課題となる。また、ホームステイができない場合の、公共宿泊施設等宿泊施設の確保も、困難が予想される。さらに、勤務外時間の有効利用プログラムと非常時対応の体制(救急医療体制)も整備しておく必要がある。行事などに伴う安全面の確保と責任の所在を明確にするなどの課題についての取り組みを進めた。

こうした取り組みを成功させるためには、実習生に意欲的に参加する姿勢と実習を遂行するスキルを身につけさせる必要がある。その意味で、事前ガイダンスは欠かせない取り組みとなる。また、学部指導体制についても、教育実習委員のプログラム企画、実施に伴う関わり方、責任主体等、明確にしておく必要がある。この時、実習生のゼミ指導教員の協力は重要な側面である。

### 2.5. 実習プログラムの企画・立案

さて、実習プログラムの企画・立案については、実

習校との個別折衝となるが、大学側は基底プログラムを示しておく必要があり、実習校がアレンジできる余地を残したもので、かつ実習校にとって参考になるものの準備が不可欠である。特に地域と学校という観点からのプログラムは、実習校にとっても初めてのことで、趣旨の理解に努めながら、地域の教育的にみて有効な取り組みを、「ヒト」や「モノ」を手がかりに学校と大学が協働しながら探索し、教育実習の活動プログラムに取り入れていく必要がある。

### 3. 2002年度 へき地・複式教育実習の試行

小学校における実習については、3月上旬の年度末の時期でもあり、各学校の状況に応じて実習プログラムを組んだ。学校での行事で「校外学習としての遠足」に同行したり、「一輪車の全校競技会」の運営アシスタントをするなど学級を越えて、学校行事に関わる姿も見られた。また、実習生の希望により、公開授業・研究授業を積極的に提案し、全教職員からコメントをもらうなどの意欲的な面も見られた。

特に、当該年度の附属学校での4週間実習を経験してきている学生にとって、少人数で、それも学年一人や二人という複式学級での実習という体験はインパクトがあり、複式授業での展開についての良さと同時に困難な面を体験した。こうした体験が、4年生での6月に行われる2週間の教育実習の場に生かされることを通して教員養成のパワーアップを意図している。子どもをじっくりととらえ「子どもに寄り添う」教育の在り方を追求するきっかけを得ているようである。

こうしたへき地・複式学級での教育実習体験は、美里地区とかつらぎ地区のそれぞれの特性を生かして行った。美里地区の取り組みの概要と学生たちの学び、かつらぎ地区の取り組みの概要と学生たちの学びについて実習後の「教育実習から学んだもの」というレポートをもとに考察する。<sup>注5</sup>

#### 3.1. 美里地区

美里地区においては3校7名の実習生を派遣した。和歌山県美里町立上神野小学校3名(男2、女1)真国小学校(男2)毛原小学校(女2)である。実習生は美里町の経営するセミナーハウス「未来塾」に合宿することにより、未来塾から実習校へ通った。それぞれの実習校まではバイクや車に分乗し毎日の移動手段を確保した。7名は下校後はセミナーハウスに戻り「合宿」生活を送った。午後6時30分に夕食をとり、朝7時に朝食をとって各学校の始業時刻に間に合うように出発するという日課である。

2002年度は特別に美里町教育委員会生涯学習課の企画による小学生を対象とした「自然体験通学合宿」のプログラムが未来塾を会場にして2003年の3月5

日から7日まで行なわれた。実習生は、5日と6日の夜に子どもたちの食事の献立計画に関わったり、自由時間に遊んだりと交流を深めた。参加児童は真国小学校と下神野小学校の児童の希望者であったため、真国小学校の子どもにとっては実習生との24時間の交流となり、貴重な体験を双方にもたらした。ただ、それぞれの計画が、あわただしく企画・立案され、実行に移されたため、十分な効果を得るところまではいかず、課題を残した。

合宿型の実習は、実習生相互の交流を図ることができると、夜に、地域と学校のあり方についての学習を企画できることである。今回、短期間で日程的にも余裕がなかったが、それぞれの夜にポイントを絞った研修・学習会を組み込んだ。<sup>注6</sup>

#### 3.2. かつらぎ地区

かつらぎ地区においては5校8名の実習生を派遣した。四郷小学校1名、四邑小学校2名、志賀小学校2名、天野小学校2名、新城小学校1名の合計8名である。いずれも女子である。実習生はそれぞれの小学校区の家にホームステイし、それぞれの近くの集団登校場所から徒歩で子どもとともに実習校に通った。山村留学を引き受けたステイ先や育友会の役員の家、一般の家など様々であったが、いずれも温かく迎えられた。短期間の取り組みにもかかわらず、多くのホームステイ先の確保を校長先生を中心にして進めることができた。しかし、課題も残った。今回のようにホームステイ先の確保については、実習校の校長先生を通して確保することには限界があり、実習地域をひろげ、受け入れ条件を出して公募し大学側(実習委員会)が決定していくというシステムを確立していくことが大切である。また、交通の不便な地域だけに第1日目の学校への移動や、最終日の移動手段の確保には、通常の実習ではないきめ細かい配慮が要求された。

こうしたホームステイによる教育実習の取り組みは、非常にユニークであるとともに実習生にとっては生涯忘れることのない体験になった。地域とともに過ごした5日間の生活から、地域に対する熱い思いを感じ取っている。

ホームステイはへき地・複式教育実習の根幹をなす取り組みであるため、よりいっそうの検討が望まれる。今回の参加学生の中には、是非、ホームステイをしてみたいという強い希望による参加動機があり、実習効果を非常に高めたと考えられる。

#### 3.3. 学生からみた実習の評価

レポート「教育実習から学んだもの」による学生の学びを振り返ると二つの大きな観点が上げられる。一つは、地域と学校の在り方を「地域に根ざす教育」という視点から把握するきっかけをつかんだことであ

る。今ひとつは、子どもをどのように捉えるかという視点関わるもので、子どもから学ぶことの意味を再発見したことである。二つの観点から、各自のレポートをみてみたい。

### 3.3.1. 地域と学校の在り方

①「(前略) へき地の特徴として、「地域との密着」が挙げられる。運動会は地域の人たちが参加するなど地域が教育に参加しているのである。私はこの点に一番注目したい。「教育というのは学校だけではなく、地域全体ですべきだ」というのが私の考えで、運動会や地域の民謡や文化などを伝える機会をもっと増やすべきであると思う。私は都会育ちで地域との触れ合いが少なかったため、余計そう思う。だから私は教師になったあかつきには地域を大切にしたいと思っている。(後略)」

美里地域 Y A 男

(以下は、報告書<注6>に掲載されたレポートの一部を引用)

②ホームステイ先は、育友会長のお宅で、小学校に通う3年の女の子と6年の男の子のいるご家庭でした。育友会長と聞きちょっとドキドキしていたのですが、お父さんもとても気さくな方で、私の大学での話や、大学でしている「実験工作キャラバン隊」の話などを色々聞いてくださいました。家では、3日目に子どもたちが習っている剣道を見学させていただきました。剣道をしている姿は家や学校で見せる姿とは違い、いろんな姿を見ることができ良かったと思います。また、3年生の女の子が工作など作る事が大好きで、ちょっとした工作をお兄ちゃんと3人でしました。学校でみんなできたら良かったと思うのが心残りです。また、最近デジカメを買ったということで、その使い方やパソコンへの入れ方など教えてあげました。機械をさわるのも好きらしく楽しんでいました。

かつらぎ地区 I N 女

③「私のホームステイ先は以前里子をあずかっていたお宅だったのですが、里子をあずからなくなってからも、小学校から炭焼き体験をしにきたことを話してくれました。そのような体験はへき地でしか体験できないことです。地域が一体となって小学校を盛り上げているというのがやはりこの地域のいいところだと思います。私も実際にホームステイをしましたが、実習中だったので、様々な体験をさせていただく時間がなかったのが残念でした。一週間というのは本当にあっという間で、ホームステイ先にはお世話になりっぱなしでしたが、家族のように接していただいて、いろいろな話を聞かせてくれたので、とても楽しく過ごすこ

とができました。」

かつらぎ地区 S A 女

④天野小学校での実習はとても短い期間ながら、小学校のよさや、教育で大切にしなければならない部分をたくさんみつけられたように思います。天野全体がまるで大きな一つの家族のように子ども達を包み込み、みんなで育てているという感じがしました。天野はとてもあたたかくて、子ども達は幸せ者だなあ、と何度も感じました。

かつらぎ地区 I K 女子

⑤志賀小学校は地域との結びつきが強く、今年は「炭焼き」の作業を地域の達人に教わっていました。もともと炭焼きは地域の人が仕事でしていたことで、今回は何十年振りかには子どもたちのために炭ができるまでの一連の作業を見せてくれていました。私たちはかまの中にも入らせてもらい、その中で地域の人が炭焼きについてのことや、地域の人のお話なども話してくれました。その内容は、今回は校長先生からこのお話があって、それで子どもたちに炭焼きを見せてあげようという思いもあったが、自分たちが何十年ぶりかにもう一度かまから作れる機会を与えてもらったことでとても感謝している、というものでした。後日行われたお世話になった地域の方への“お礼の会”でも地域の人たちのお話の中に、「もうすることは無いと思っていた炭焼きができたし、昔の仲間ともういちど仕事をできた事がうれしかった」「子どもたちと話す機会がふえ、見かけたら声をかけてくれたり、手をふってくださることがうれしい」「老後の楽しみ」などという声ばかりでした。私はこのことにとても感動しました。地域と学校の連携と叫ばれているなかで、このようなへき地の学校ではそれが自然とできているのだろうと思いました。また地域の協力なくしてはできないこともたくさんあるのがへき地の学校でもあるのだと感じました。

かつらぎ地区 T A 女

⑥「学校と地域との距離の近さに驚きました。近年では、学校、家庭、地域が連携して教育をすすめることが求められています。しかし、私の地元では、学校と地域が関わる機会はありませんように感じるし、地域同士のつながりも希薄になってきた気がします。今回の実習の中で、教頭先生に地域を案内していただき、毛原小学校に通う子どものいる家庭を3軒、訪問しました。どの家でも教頭先生と楽しく会話しているのが印象的でした。学校と地域の距離の近さというよりは、学校と地域が一体になっているように感じました。このうち、ある家庭の話の中でとても印象的だったのが、近所の人には自分の子どもが悪いことをしていたら、き

ちんと叱って報告してくれる、ということでした。市街地のように人間関係の希薄な地域では見られないことだと思いました。本当に地域で子どもを育てていて、地域がもう一つの学校の様でした。」(中略)「地域同士のつながりのために学校が存在し、学校の教育のために地域が存在するということが身をもって実感できました。本当の意味で「開かれた学校」を見ることができた気がします。」

美里地区 BA 女

⑦実習中は、学校の子どもたちや先生だけでなく、地域の人やホームステイ先の家族とのふれあいを通じ、人の温もりに触れることができた。行事を通して、日ごろの授業や遊びを通して、心の通い合う場面が数多くあったし、僻地の小規模校の良い面をたくさん発見できた。

この志賀地域では、地域の人が学校にとっても協力的で、学校側もその期待に沿うように、総合的な学習の時間(通称『ミラクルタイム』)で、地域のお年よりの人たちと子どもたちの交流を大切にしていた。今年一年間の主な取り組みの一つに、「炭焼き」があったそうだ。「地域の達人」と名づけられた人たちが、学校のすぐ近くに、子どもたちのために炭焼き釜を基礎から作り、炭入れという作業などを見せてくれたそうだ。私たちの実習期間5日間にも地域の人と関わる行事があり、そのうちの一日、「炭出し」という作業を見学させてもらった。大人三人くらいしか入れない小さな炭焼き釜に入って話が聞けるといって、貴重な体験を私もさせてもらった。子どもたちも興味を持って自主的に質問したりしていた。やっぱり、体験学習のいいところは、子どもが食いついてくるところだと感じた。

また、子どもが地域の人から学ぶだけでなく、地域の人も子どもから元気ももらい、子どもたちとの交流を、自らの生きがいと感じているようなお年よりも多いと感じた。というのも、感謝の気持ちをこめて、子どもたちが開いた「お礼の会」でのことである。あるお年よりは、「私らはもう学校と関わることは無いと思っていた。炭焼きの作業に関わってから子どもに声をかけてもらえるのがうれしくてしょうがない。」と逆に感謝の意を表した。これはまさに、今日さかんに言われている「学校と地域の連携」の良いモデルなのではないかと感じた。

かつらぎ地区 BE 女

3.3.2. 子どもをどう捉えるか

①「私だけでなく、先生方ももちろん、全ての子どもを知っている。先生方どころか、事務の先生や給食指導の栄養士の方も、全ての子どもと仲良しだった。全校生徒が何百人といるような一般的な学校だっ

たら、担任の先生が自分のクラスの子どもの状態を把握するだけで精一杯だろう。でもここではそうではない。全ての先生が全ての子どもたちの状態を把握し、学校全体で一人一人の子どものことを大切に考えているといった感じなのだ。それも私にはとても魅力的に感じられ、たとえ1週間でもその一員に私も加わることができたことがうれしかった。」

美里地区 SI 女

②「最後に子供が好きで、いつでも楽しい雰囲気を出せる力があれば大丈夫と自信を持っていましたが、やはりそれだけでは不十分ということを知り初めて体感しました。授業案を最後まで煮詰めきれずに次の日を迎えることがありました。それで授業をし、何とか終わったけれど後味が悪いと言う感じです。子供が好きイコール楽しく盛り上げて楽しそうな子供の顔を見るのではなく、子供が好きイコール眠気にも負けず子供の最高の笑顔を見るために完璧に計画を立てきり、そして楽しく盛り上げていく事こそ子どもが好きといえるのだと思いました。」

美里地区 SA 男

③授業を見学させてもらい一番感じ、驚いたことは、子ども達が、次にどのような準備をしなければいけないのか、どのように行動すればいいのかを自分達で理解し、実行できていた事です。複式の授業では異学年が異なった内容の勉強する事が多々あるので、先生がずっと同じ学年を見ていられません。そのために、自分達でしなければならぬ事が多いのですが、先生が見ていなくても騒ぐ事もなく、与えられた課題を友達と考えながらこなしていました。

かつらぎ地区 SA 女

④へき地の学校では、子どもと教師・異学年どうしの距離がとても近く、とても学校のなかの雰囲気が暖かいです。教師は子どもから「日々の成長」という喜びを与えられ、子どもはたくさんの教師から暖かい目で自分をみているという嬉しさを与えてもらっているような感じを受けました。教育は、直接相互に喜びを与えたり貰ったりでき、しかも「子どもの成長」という大切な場面に立ち合えるところが魅力的だと感じました。

美里地域 IC 女

⑤教師になりたいという一心で子どもに接するあまり、大人という立場の目で彼らを見てしまっているのではないかと。彼らには彼らの考えがあり、楽しみがあり、世界が広がっているのである。1分1秒を本音で生きている彼らと接するうち、先入観で判断し、実習生という立場の権利を使って物事を片付けてしまお

うとしていた自分が情けなかった。一人ひとりが何を考えているか、どんな思いを抱いているか、同じ目線で話を聞いてあげることが大切だと感じさせてもらった。このことは自分が生徒だったとき、向き合ってくれないいい加減な態度の教師に求めていたことなので、改めて確認できて良かったと思う。

かつらぎ地区 KO 女

⑥わたしはこの実習で子どもたちと信頼関係を築いていくには「遊び」が有効な手段であるということを知った。遊んでいるときは子どもたち全員がそれぞれ楽しんでいてその中にわたし自身も楽しんで遊びのなかに参加することによって授業とはまた違う子どもの一面を見ることができ、子どもたちと話していくうちに子どもたちとの仲も深まっていき、それが普通の生活にもプラスにはたらくていくと思う。授業を行う際にも、遊びを通して信頼関係を深めていたほうが子どもと一体になったよい授業を行えるのではないかと思った。

かつらぎ地区 MO 女

#### 4. 大学と実習校との協働

短期間の実習期間にもかかわらず、両地区共通してみられた傾向は、実習期間中だけでなく、その後の交流をおこなうなど、年間を通して関わっていくという双方の機運が作られた学校があった。2002年度の教育実習（試行）を終えて、すでに、自発的に卒業生を送る会や卒業式に参列するなど、発展的な取り組みが継続されている。

また、授業に関わって、教材開発という観点からの和歌山大学とそれぞれの学校との協働については、教育実習を継続して行う上で、実習校や実習生に教育内

容や教材を具体的に提供するという点で、重要な取り組みとなる。このために、平成15年度大学特別経費による研究成果をまとめた。（へき地複式学級実習地域における授業開発研究プロジェクト＜研究代表川本治雄＞）この中で扱った教材化に向けての基本的な考え方や具体的な取り組みの概要は、は次の通りである。

注7

第1部 地域教材の持つ意味と価値

第2部 地域の教材化を図るための地域「素材」の検討

○地図にない地名から復元する中世

＜もののけ姫の世界＞

－お年寄りに教わろう－

○川の石を教材に感動と驚きを伝える

－河原の石と地形図を読んで－

○中学年社会科教材開発

－町民のつくりだすもの－

このような取り組みを各教科に関わる専門分野の研究を生かす方向で推進することが、各学校と大学が教育実践の分野で研究を進めることにつながる。今、地域で学生を育てるといふ取り組みをすることによって、教育的実践力を持った教員養成を実のあるものにすることができると考えている。

#### 5. 小括

大学において、地域と学校の間を把握するきっかけを学生に提供することは、重要な課題である。へき地・複式学級における教育実習は、これからの教員養成において重視されなければならない二つの課題（①『変容する教育現場の実態を踏まえる』②『そこでの教師の仕事や役割を総合的に捉える』）を、学生に提供する取り組みとなる。

#### 注 記

注1 国立の教員養成系大学・学部の在り方に関する懇談会『今後の国立の教員養成系大学・学部のあり方について』平成13年（2002年）11月

注2 日本教育大学協会「モデル・コア・カリキュラム」研究プロジェクト「教員養成コア科目群を軸にしたカリキュラムづくり」中間答申 平成15年（2003年）9月

注3 同上

注4 和歌山大学教育学部・和歌山県教育委員会連携協議会『連携から協働へー和歌山大学教育学部と和歌山県教育委員会の連携による活動報告書ー』平成16年3月発行

和歌山県下の小学校複式学級の推移（平成8年～13年度）、和歌山県下へき地・複式学校数（平成13年度）、近畿府県別へき地校数（平成13年度）

＜和歌山県教委と和歌山大学教育学部の連携協議会の複式教育専門委員会における資料提供＞



資料1 複式学級数の推移

	H 7	H 8	H 9	H 1 0	H 1 1	H 1 2	H 1 3
小学校	150	151	161	158	163	174	187
中学校	0	0	0	0	0	0	0

資料2 平成13年度複式学校数 複式学校数割合28.6%

	伊都	那賀	海草	有田	日高	西牟婁	東牟婁	計
へき地複式校数	7	2	4	14	14	13	7	61
(へき地校数)	(10)	(3)	(5)	(15)	(20)	(16)	(11)	80
へき地外複式校数	4	1	3	0	7	10	4	29
複式学校数	11	3	7	14	21	23	11	90

資料3 近畿府県別へき地校数

	兵庫県	大阪府	京都府	滋賀県	奈良県	和歌山県
小学校	76	3	40	11	33	80
中学校	19	0	15	5	18	35
合計	95	3	55	16	51	115

注5 和歌山大学教育学部教育実習委員会『教育実習カリキュラムの改革—へき地・複式教育実習の試行—』  
平成14年度学長裁量経費報告書15～29頁

注6 資料4 美里地区における地域を生かした夜のプログラム (2002年度1週間実習の実践事例)

日時	研修内容	場所
第1日目 3月3日 7:00-	自然体験世代交流センターでの地域のグループによる「大正琴の練習」の参観のあと、同センターで元美里中学校校長先生(濃崎自然体験世代交流センター長)による地域と学校のほんとうの連携のあり方についての実践を紹介しながらの講話	自然体験世代交流センター (未来塾より車で10分)
第2日目 3月4日 7:30-	未来塾にて美里中学校における情報教育と美里町の情報化推進についての講話を和歌山大学の豊田先生より、報道された番組を編集した資料を使って受け、情報化の内容を具体的に知る。	美里町セミナーハウス 「未来塾」
第3日目 3月5日 7:30-	未来塾に宿泊した小学生が明日からの夕食の献立を作成し、そのための買い物に行く計画を立てるに際し、アドバイスを行なうという立場で、子どもの指導・助言にあたる。(教育委員会の企画による自然体験通学合宿プログラムの一環として指導に当たる)	美里町セミナーハウス 「未来塾」 5日及び6日の両日
第4日目 3月6日 8:00-	美里天文台での天文台の見学と講話。 美里町の情報化推進の大きな役割を担う美里天文台の活動と具体的な施設の見学および天体などについての教材研究	美里天文台 (未来塾より 徒歩20分 車で7分)

注7 地域教材プログラム開発プロジェクト『へき地・複式教育実習地域における地域教材プログラムの開発』  
平成15年度大学特別経費「教育・研究」報告書2004.3